

グリーンに於ける「裏切」

矢野道夫（外国語研究室）

Michio YANO:

'Betrayal' in G. Greene

A (1)

我々の住む世界に「悪」の存在することは何人も否定できないであろう。グリーン（Graham Greene, 1904—）はこの「悪」の存在を出発点として、思想、宗教、文学を展開させたが、同じく「悪」の問題から考をすすめながら違った結論に達した者にモーム（W. S. Maugham, 1874—）がある。今、対照の為しばらくモームの「悪」について考えて見たい。モームにとって「悪」とは天災、病気、戦争、利己心、嫉妬、貧乏、苦痛、迷信等、人間の幸福と矛盾する一切のものを意味していた。彼はこの世にこうした悪あるが故に神を信ずることができなかった。何故なら、万能で十善であるべき神がこの世に悪を創り出して人間を苦しめることは自己矛盾だからである。懲罰的な、或は復讐的な神を彼は考えることができない。一方「悪」の相対物として彼は「善」を考えることができた。しかしながら、モームにあってはこの「善」は「悪」を説明したり、補償したりするものではない。生れて間もない純真無垢な幼児が脳膜炎で苦しみながら死んで行くという「悪」は、その死によって周囲の人達が如何に哀憐の情を催そうとも、又如何に「善」の行為がそれから結果しようともその幼児の死を説明したり補償したりすることはできない。神がその幼児を現世の苦しみから救おうとして早く天国にお召しになった、と考えようとしても、それでは神がその幼児を世の中に送り出されたこと自身が悪ではあるまいか。この世に存在する悪の総和は善の総和をはるかに上廻るのである。神を信じようとしてもこの「悪」の存在故にモームは信ずることができなかった。そして神への不信を公言し、この悪に満ちた世に生きる道として、寛容、忍耐、諦観をといた。しかしこのように「悪」を提出しながら、このように「善」を考える限りモームには解決もなければ救いもないのは当然である。彼はキリスト教と近代科学との不思議な混血児であった。彼によって提出された「悪」はその相対物として、それを説明し補償するものとして神を考える以外に道はないのである。「善」とは神に外ならない。そしてその神を求める道を辿ったのがグリーンであった。モームと違って「悪」あるが故に彼は神を信ずることができた。この点グリーンの考えは首尾一貫しているといえる。

(2)

勿論我々はどのようにしてグリーンが神を信ずるに至ったか、その過程を詳にし得ない。彼自身、友人にもその事情を語ろうとしないように見える。又その神がカソリックの教義とどのように合致し、或は合致しないかを論ずることも私の任ではない。私がここで出来ることは彼が信仰に入った動機を一応推察してみることである。

彼は1936年出版の旅行記 *Journey Without Maps* の冒頭近くで “I am a Catholic with an intellectual if not an emotional belief in Catholic dogma; I find that intellectually I can accept the fact that to miss a Mass on Sunday is to be guilty of mortal sin.” (私はカソリックの教義に対して、情緒的とは言えないまでも知的な信仰を持つカソリック信者である。私は日曜日のミサを怠ることが大罪を犯すことになるという事実を知的に承認できると考える) と言っている。ここで問題になるのは「知的」という語である。元来宗教に於て「知的な信仰」ということが果して可能であろうか？信仰である限りそれは知的なものを乗りこえたものである筈だし、又知的なものならば信仰という言葉を使わなくてもよい、とも考えられる。その論議はさておいて彼が「知的な信仰」という自己矛盾的な語をわざわざ入れなければならない所に彼の苦衷があるように考えられる。少く共彼はよくあるように、漫然と習慣的に、或は感情的な雰囲気にかかれてカソリックに入ったのではないことは確実だ。そこには冷静な思考と判断があった筈である。彼は Oxford で Vivien Dayrell-Browning というカソリックの女性を知り、1926年2月英国教会からローマカソリックに改宗、翌1927年10月彼女と結婚したと云われる。⁽¹⁾ 22才の頃である。しかしここに至るには幼年時代から青年期にかけて多年にわたる体験と苦悩が彼にはあった。彼の *The Lost Childhood and Other Essays* (1951) の中の *The Lost Childhood* 及び *The Revolver in the Corner Cupboard* という回想紀で我々はその状況を知ることができる。前者の中で彼は読書が幼年時代に及ばず影響を力をこめて強調し、彼自身読書によって未来を決定されたという痛切な体験を語っている。彼はこう書いている。「私が(その頃までに私は14才になっていたと思うが)書棚から Miss Marjorie Bowen の *The Viper of Milan* をとった時、私の未来は良かれ悪しかれ本当に進行を始めた。その瞬間から私は物を書き始めた。私が選んだかもしれぬその他の未来は一切消え失せてしまった。」彼が作家として立つ決心乃至希望はこの時に定ったのである。この二流作家の著した中世の闘争物語が何故これ程少年グリーンを感動させたのか。それはその物語の中の何物かが彼の心の琴線にふれたからである。換言すれば他の人であれば何気なく読み過すかもしれぬ所に彼が異常な反応を示す素質が既にそこにあったと云える。そして読んだ時期も又決定的であった。彼の14才の時と云えば丁度第一次大戦の終った頃であって、世界は暗澹として絶望的な人間観が支配していた時期である。そして彼が過した不幸な学校生活もその決定に拍車をかけた筈である。この物語の人物の一人 Verona 公は「遂に、ひき合わぬ誠実を棄てて友人達を裏切り、裏切りにさえ失敗して不名誉の中に死んだ」男であり、又他の一人の Milan 公は「美貌と忍耐力と悪にかけての天才をもった」男である。彼はそこに人生の真相を直感した。彼はそこに創作の無限の題材を見出した、彼

の余りにも印象的な言葉は次のように綴られている。「善は一度だけ完全な人間の姿をとって現われたことがある。そして二度とは現われまいであろう。しかし悪は常に人間の中に棲家を見つけることができる。人間性は黒と白ではなくて黒と灰色である、私はそうしたこと一切を *The Viper of Milan* の中によみとった。そしてあたりを見廻した、そして事実その通りであることを知った」14才の少年が始めて眼を開いて見たものは「悪」の姿であった。では我々はこの人生をどう生きたらよいか。少年の苦闘はここから始るのである。

彼がこの物語に読みとった教訓はもう一つあった。即ち運命の振子が常にゆれんとしていること、成者は常に敗者とならんとしていることであった。「成功がどんなにそと、であれ、自分にも及びより始めた時は、失敗が余り長い間延期されまいようにと祈る外はなかった」と彼は書いている。

要するにグリーンはこの書物に行きあたった事によって決定的な一步を踏み出した。同じ事を後年宗教が違った言葉で説明してくれるかもしれないが、その宗教を受け入れる素地は充分ここに出上ったのである。完全な善が二度と現われまいこの地上を完全な悪が横行しているが、振子の原理によって必ず最後の正義は成されるであろう。しかしそれはこの地上に於てではないかもしれぬ。

註 (1) John Atkins : *Graham Greene*

(3)

これは不幸な開眼であった。このような考え方が若い少年に普通の平凡な生活を営ましめる筈はない。前述の回想記 *The Revolver in the Corner Cupboard* は正に異常な体験の記録である。1922年の初秋、彼が17才の頃であった。彼は兄と共用の寝室の戸棚の中に6連発の拳銃を見つけた。兄には黙っていたが、それを見た瞬間から彼はあることにそれを使用しようとして決心した。それはかつてよんだ書物から知ったもので、白色ロシヤの将校達が革命戦争末期に無為倦怠を逃れるために用いた方法であった。拳銃に一発丈弾薬をこめて、背中で薬室をぐるぐると出鱈目にまわす、そして耳に銃口を当てて引金をひくのである。助かる率は5%である。彼はこれを何の躊躇もなしに実行した。では何の為にこんなことをするのか。倦怠、乾燥状態 (boredom, aridity) の為であった、と彼は言明している。その当時彼が陥っていた妹の家庭教師への絶望的な恋も少しは影響していたかもしれないが、主原因は倦怠であった。と云うのは、彼は5~6年前に様々な薬品や毒草を用いてやはり半自殺的行動をとったことが何回もあったのである。そして彼の行為はあくまで自殺ではなく、gambleであったと彼は云う。しかも驚くべきことは、この6連発の拳銃で6回、即ち薬室の数丈同じ遊びをくり返して、遂にそれから刺戟が最早得られなくなった時始めてやめている事である。17才の少年にこのような危険な遊びを単独で決行させる「倦怠」とはそもそも何に起因するであろうか、彼はこれにふれて次のように書いている。「そうした倦怠は当時の恋愛よりもっと深く根ざしたものであったと思う。倦怠は常に幼年時代の特徴となっていた。それは休暇の2日目から始るのが常だった。学校で恐い監禁と衆人環視の生活をした後では、その日は光と空間と静寂から成っているかに見えた、併し牢獄はそこに住む人を規定する。私はそこに帰って行きたい

とは毛頭思わなかったが、(そして結局私は家出とい簡単な行為で私の叛逆を実行することになったのだが) それでいて、牢獄に規定をうけた私は自由に対しても云うに云われぬ程の倦怠を感じた」彼の異常性は家族の中でも特にひどかったらしく、この家出の後で精神分析医に送られて治療を受けたことがある。併しこの治療も彼の倦怠感を定着させたにすぎなかった、といている。我々は彼の倦怠感の原因の中に、憎悪すべき学校生活、彼のもって生れた性格を教えることができよう。そしてそこには前述の「悪」への不幸な開眼、即ちこの悪に満ちた世界は果して生きる価値ありや否や、という大問題も潜んでいた筈である。我々は彼の倦怠感が何に起因するか正確に究めつくすことはできない。併し我々はその倦怠感の行方を知っている。それは1926年彼がカソリックに改宗した時終った。たとえこの改宗の動機が何であったにせよ、その根底には少年時代に知った悪の存在、そしてその悪の超克への志向があったことは自明のことに思われる。この世の悪を説明し補償するものは神以外にはない。そしてその神はカソリックの神でなければならぬ。何故ならカソリックの神が最も「悪」に直接しているからである。グリーン自身も作中で神父にこう云わせている。「カソリック信者は誰よりも悪の能力を持っている。恐らく私達は悪魔を信じているから、一層他の人より悪魔に接触しているのだらう。だが私達は希望をもって祈らねばならぬ⁽¹⁾」免に角この改宗は彼が倦怠に別をつけて生きる力を見出したということの意味している。彼にとってこの到達点は人生を真面目に生きようとするれば、いやでも行きつかねばならぬ終着点であった。

註 (1) *Brighton Rock*, 終章

(4)

かくの如くグリーンは人間界を悪の風土と観じ、そう観ずることにより神の認識に到達したと云えるが、その神は人間に原罪を背負わせ、天国と煉獄と地獄でもって裁く神だった。その教会は2千年の伝統と国際的な組織をもち、人類の悪の試練に堪えて来た教会だった。そこには矛盾するもの、不合理なものがあるかもしれぬ。しかしその神は正に彼の感ずる「悪」に満足な答を与えてくれると「知的」に信ずることのできる神だった。彼の「知的な信仰」という言葉はこのように苦しい体験と思索の後発せられたものと解すれば我々にも納得できるように思われる。とに角、この神を見出すことによってやっと彼はこの世の悪を越えて生きる力を獲得したが、同時に彼はそこに大きな使命を見出したと云える。何故なら、この世に充満する人間悪を提示し、悪にフラストレイトされる人間が平安に達しうる道は唯一つ、神をうち樹てる以外にはないということを示すのが小説家グリーン⁽¹⁾の任務となったからである。彼の文学を不安の文学の範疇に入れることは勿論可能である。併し彼が神を信じた瞬間、彼にとっては不安は解消した筈である。彼がどのように深刻な不安を描いて見せようと救済の道は唯一つ、神に至る道しか示されない。そして不安が深刻ではげしければはげしい程、それ丈一層神の出現は早いかもしれぬ。

さて彼が神を信じたことにより彼の文学にどのようなことが結果するか、我々はそれについて少

く共二つの事を指摘できる。第一に、彼の文学は必然的にプロパガンダの文学になるという事である。この点共産主義文学に似ている。勿論文学がプロパガンダであっていけないという理由はない。逆に彼はこれこそ文学の使命と考えているであろう。彼は次のような T. S. Eliot の言葉を肯定をもって引用している。「大抵の人間はほんの少し丈生きているに過ぎない。そこで彼等を靈的なものに目覚めさせることが極めて大きな責任となる。彼等はそのように目覚めた時始めて真の『善』をなす能力を得る、併し同時に彼等は先ず『悪』をなす能力を得るのである」と。彼の文学がプロパガンダを使命とする以上彼の書くどんな物も、たとえば entertainment (娯楽物) であっても、そこには神への志向がある筈である。事実、彼の「娯楽物」には普通の常識では割り切れぬ或る物が流れているのである。又、ここから次の問題、即ちプロパガンダと作家の自由の問題が起って来る。作家が人物を創造する場合、それが必ずしも教会の制約内で行動するとは限らない。作家の良心は必ずその人物をしてそれ自らの道を歩ましめるであろう。後年、グリーンは *The Heart of the Matter* を書いてカソリック陣営からごうごうたる非難の声を浴びせられたが、これは当然予想される事であった。併しカソリックの教会から離脱することは自己を再び混乱と絶望の中に投げこむことである。少年時代から持ち続けて来た「悪」の固定観念を棄てない限り、彼は容易に教会を離れることはないであろう。

第二に結果することは、彼の文学は必然的に裏切を扱う文学になることである。普通裏切は人間に対するものであろう。併しグリーンに於ては、すべての悪が神に対する裏切に還元される。何故なら、裏切を含むすべての悪に対して人間がいただく「罪の意識」は神に対する裏切の結果に外ならないからだ。彼がカソリックに改宗したということは、原罪を少く共「知的」に信じたことを意味する。従って人類の最初の悪が神への裏切であったことは、彼にとって悪の本質を説明するものであった。彼が好んで裏切をとり扱うのは、それが悪の象徴の意味を持つからである。勿論現実には裏切とは感じられぬ悪が存在するであろう。それはその人が未だ目覚めない状態にあるのであって、それを覚醒させるのが文学の大きな任務となるのである。このようにすべての人間悪が「神に対する裏切」に帰納され、集約されて行くのがグリーン(2)の文学である。

では「神に対する裏切」という悪に満ちた人間は如何にして救われるであろうか。この一見解決不可能に見える問題も、実は問題自身の中にその解決の緒口を含んでいるのである。人間は自らを悪と認識することに依り、即ち自らの悪に目覚めることに依り、善を知る可能性を与えられる。善、即ち神に至る道は自らの悪を踏み越えた所に開けるのであって、それ以外に道はないのである。我々はもう一度、上述のエリオットの言葉を思い出す必要がある。「彼等はそのように目覚めた時始めて真の『善』をなす能力を得る、併し同時に彼等は先ず『悪』をなす能力を得るのである」。直接「善」に到達する道はない。必ず「悪」という廻り道をしなければならぬ。我々は「善人往生す、いわんや悪人をや」という東洋の教を知っている。私はこの「善人」の意味を詳にしない。併し、誰にも解ることは、悪人の方が善人よりも仏に近い、ということである。これはグリーンに於ても同様である。彼に於ては善人は容易に救われないのである。否、彼が攻撃の鋒先を向けたのはこの「善人」であったと云っても過言ではないだろう。「善人」とは実は言葉の矛盾であって、この世には悪

人しか存在しない。自らを善人と考えたり、人からも考えられたりする者こそ神から遠い、と彼は云っているのである。人間が救われる為には悪に徹する以外に道がないとすれば、ひたすら悪を見つめて悪の中に神を模索する外はない。かくてグリーンはあくことなき「悪」の探求となる。神の面前に於ては piety (敬虔) さえ悪として、神への裏切として意識される。そして彼の熾烈な罪の意識は屢々苦悶の叫となり、非カソリック教徒には「罪を罪の為に求める」が如き残虐感を与えることにもなるのである。

上述の如く、グリーンに於ては人間悪は「神への裏切」として捉えられ、しかもその裏切によって始めて人間は救済の可能性を獲得する。ユダの裏切によってキリストは始めて真のキリストになったが、同時にユダは裏切ることにより一步神に近ずいた筈である。グリーンは小説に於て裏切が如何なる姿をとって現われ、如何にして神への跳躍台となるか、或は、なるべきか、を検討してみるのが私の次の課題である。

註 (1) 加納秀夫著「不安の現代英文学」(南雲堂)

(2) G. Greene : *The Lost Childhood and Other Essays* (Frederick Rolfe)

B (1)

辞書 (SOD) に依れば、裏切 (betrayal) とは、(1) 欺して敵の手にひき渡すこと、(2) 信頼に背くこと、(3) 意志に反して思わず曝露すること、を意味し、同時にその受身形「裏切られること」を意味している。グリーンは裏切はこのすべての意味に於てあてはまるのである。又、裏切は人に対するものと、神に対するものとに大別され (常識的な意味に於て)、その各々が意識的なものと無意識的なものに細分されるであろう。

グリーンは「人に対する意識的な裏切り」から出発した。*The Man Within* (1926年執筆開始、1929年出版) がそれである。それ以前に既に小説を二つ書いていたが、それは彼が「二つ共ハイネマン社が拒否したことを感謝する」ようなものだった。従ってこれが彼の世に問うた最初の野心作といってよいであろう。すべて処女作というものはその作家の持つ資質や傾向を伝え、時には将来の発展を予見させるものであるが、グリーンの場合にも適切にあてはまるように思われる。ここでとり上げられた裏切という人間悪は将来諸悪の原型として、又根源としてグリーンは作品を彩るのである。これは裏切小説ではあるか、その裏切が恋愛を通して克服され、否定されて、平安がもたらされるという意味に於て一種の恋愛小説と見ることもできよう。そこに、幾分幼稚で実験に満ちたこの小説が今でも人をひきつける一つの理由があるであろう。「内部の男」というのは Sir Thomas Browne の “There's another man within me that's angry with me.” からとられていて、主人公アンドルーズの内部にあって機会ある毎に批判の声を上げる第二の彼である。アンドルーズが天性として持っている、救いようのない臆病、感傷、情欲と、この批判者との相剋が何度かの裏切を経ることにより、克服され統一され遂に信仰への接近に終る過程を描いている。その点に於て信仰小説とも云える。アンドルーズは密輸業者の息子であった。父は業界の親分として部下達から畏怖

されていたが、家庭にあっては全くの暴君で妻子に無残な打擲を惜しむ男ではなかった。子供に学問させるという父の見栄からアンドルーズは遠くはなれた学校へやられる。学校は大嫌いだったが、母に死なれた家庭よりもよかった。ある日彼は学校を逃げ出して好きな丘に登る。そこで彼は、父の非業の死を告げて彼を迎える為に来た父の服心の部下カライアンと偶然出会う。その出会いの場面がこの小説で最も美しい個所の一つだと私には思われる。若き日のグリーンは青年のみのもつ抒情性を随所に漂わせている。アンドルーズは地上を見つめたまま一心に丘を登って行く。そうするのが早く登れるように思えるからだ。225歩で頂上につくことを彼は知っている。頂上は近い。221, 22, 23, 24, 25——そして彼は眼を上げる。その男は彼が来たのも知らず、向うを向いて股を大きく開き（船乗りの癖）、落日の美しさに見とれていた。彼が近づくとも男はふりむいて（アンドルーズとは知らずに）、「見たかい」と落日をさして云う。その瞳は時々笑うが、その基調は思いに沈んだ悲しみを現わしていた。そして二人は黙って立ったまま落日に見とれる。彼が父の後を継いで密輸業者の仲間に入ったのは、この父であつたらと願うカライアンへの思慕からであつた。裏切は献身者（devotee）を予想させる。この彼のカライアンへの献身によって彼の裏切は益々完全なものとなる。父が死んでこれからあこがれの平和が来ると思つて入つた船ではあつたが、そこには父が亡霊となって依然として生きていた。父の勇氣、仕事ぶり、英雄ぶりが語り草となって生きていた。‘If you are your father’s son’ という期待と激励の言葉が絶えず彼にかけられるのだった。併し彼は性来の臆病者だつた。仲間はどうとう彼に見切りをつけるが、やはり「父の子」として飾物にされる。彼はその生活に堪えられない。‘I’m of importance now’ と彼等に云つてやりたい。彼はとうとう仲間の密告者となる。第一の裏切である。裏切の最大の理由は「自己の存在を仲間を示す為」であつた。自己主張が「悪」の形をとつて彼を「密告者、裏切者、ユダ」にしたのだった。彼の官憲への密告により、仲間の一部が捕えられ、役人が一人殺される。アンドルーズの逃亡が始り、カライアンの追跡が始る。カライアンは愛する者の裏切により怒は絶頂に達している。アンドルーズは逃れ逃れて、丘を越えた林の中にあるエリザベスの家に侵入する。彼女は前に母に死なれ、今又下宿人ジェニング氏に死なれたところだつた。アンドルーズはその葬式に立合わされたりするが、霧に迷ひ空腹に迫られたりして、再びエリザベスの家に帰つて来る。そこへ彼を探してカライアンがやつて来るが、彼女がうまく欺して追い返してくれたことから二人は急速に近づいて身上話をする。アンドルーズはこの家に居て、二つの分裂する自己は一つになり、まるで音楽で経験したことのあるような云いようもない平和を感じず。エリザベスも又孤独に疲れ果てた女であつた。二つの相寄る魂。併し彼の内の第二の男が、彼女に近寄るのは情欲にすぎないと云つて拒否する。と云つて、彼はそこを立去る決心がつかない。その時近くのルイス町で開かれる巡回裁判へ行つて証言する決心を彼にさせたのは、今では愛情をいだき始めたエリザベスの激励というより、むしろその失望だつた。というのは、彼女の「できる丈のことはしましたが、もうあなたには愛想がつかしました」という言葉に彼は奮起する。「君は間違っている。間違っていることを証明してやろう。僕はルイスへ行くよ」前に彼をして裏切に走らせた自己主張がここでは逆に働くことを我々は

知る。これがアンドルーズの立直りの第一歩であった。併し彼の求めてやまぬ平安はこのようなプライドという感傷では容易に達成されないであろう。彼は自分の決心を示す為、又エリザベスの獲身用にと、自分の名の書きこまれたナイフを残してルイスに出かける。だがルイスでの二日間はアンドルーズにとって恥辱の連続だった。偶然の事から密輸団事件担当の弁護士に拾われて証人となるが、この裁判は不思議にもアンドルーズ達の敗北に終る。相手方に辣腕の弁護士がいたことと、アンドルーズの疲労と自信のなさがその原因だった。かくして彼は三度エリザベスの家に帰って来る。今では彼女は 'a saint' として彼の心に刻みつけられて、唯一の救いとなっているのだ。そして彼女に自分は新しく三度裏切をしたと告げる。第一は昨夜女と泊ったこと、第二は法廷で彼女が自分をかくまってくれたことがばれたこと、第三はその為カライアン一味がエリザベスに復讐に来ようとしているので、その警告に帰って来ながら直ぐに云わなかったことである。では何故今まで云わなかったのか、と詰問されて「君に逃げて貰いたくなかったからだ」と答える。彼女は彼に対して云い切る、自分は逃げない。こんな弱い女に危害を加えようとする人間なら卑劣者だ、ここに止って戦いましょう、と。しかし臆病に生れついた彼には銃をとって戦う勇気がない。彼は批判者である第二の自己に訴えて見たが、それは何も云おうとせず彼の最後の決断を迫った。彼は止まる決心をする。二人は背水の陣を布くことにより、あらためて愛を誓い合う。そして暫時の宇頂天の会話。彼女は彼に自分を与えることを約束するが、「神への信仰」の為、正式に結婚するまでは駄目だという。彼は抗儀する。神、神というが、あなたの神は何をしてくれましたか、と。之に対して彼女は暫く考えていたが、「私は生きています」 'I am alive.' と答える。彼女の信仰が序々にアンドルーズに影響を与えて行く。やがて来るべきもの、カライアン一味の復讐はやって来た。耳ざとく気配で知ったエリザベスはアンドルーズを怖がらせない為、彼を水汲みに行かせる。水を汲んで帰る途中、一味のジョウが家に入るのを見たアンドルーズの恐怖。彼は一目散に本能的に泉までひき返す。これではならぬと思いかえしてアンドルーズのとった手段は救援を求めに走ることだった。併し応援依頼は仲々きいて貰えなかった。やっと馬をはしらせて帰って見ると、既にカライアンも来てテーブルに坐っていた。エリザベスは坐ったまま向うをむいていたが、既に死んでいることは明らかであった。彼女は殺されたのではなかった。一味のジョウが来た時、彼女は誰かを待っている風だったので、ジョウは苛立って乱暴しようとした。そこで彼女はアンドルーズが与えたナイフで自らを刺したのであった。エリザベスの死を前にしてカライアンへの憎悪は消え去る。この完全な生の破滅を前にして憎悪等は兇戯のようなものだった。彼は始めて悟る、自分が戦って来たのはカライアンとではなく自分の父とであった、と。父が、父の情欲と臆病が自分の中に宿って自分を裏切者にし、そしてエリザベスを殺したのだ、と。彼は云う、「しかし、父よ、あなたも死なねばならぬ」と。父を殺すとは自らを殺すことを意味する。これは臆病な彼にとって容易なことではない。だがエリザベスの死骸を前にして彼の決意は 'I'll try.' から 'I shall succeed.' へと変って行く。死を決意して彼は思いがけず幸福だった。何故なら、彼の父は殺されたが、一つの self が残ったからだ。その「自己」は情欲も瀆神も臆病も知らず、唯平和と闇への好奇心を持つ自己だった。

それは信仰ではないが信仰へのきざし ‘a stirring of belief’ だった。四度目の裏切りによって彼は平和を勝ち得ていた。最早、父の亡霊に悩まされることもなく、二つの自己に分裂する必要もなかった。「私がああ批判者である」‘I am that critic.’ これが彼が最後に到達した境地である。そして役人に連行されて行く途中、エリザベスを殺したあのナイフで自らを刺すことが暗示されてこの小説は終る。

以上、長々と内容を紹介したのはグリーンの「裏切」とはどんなものであるか、そして裏切がどのようにして起り、展開し、克服されるかの一例を示したかったからである。この小説中でアンドルーズの発する「神という語が次第に意味をまして行く様は注目に値しよう。初めは ‘for the love of God’ といった芝居の台詞から借用した無意味な語から、次第に切実さを加えて ‘O God, if you are God’ となり、遂には端的に ‘O God’ という呼びかけになっている。併し彼は信仰の一步手前で止った。「若し彼がもう暫く彼女と一緒に暮していたら、彼は靈魂の不滅と復活を信ずるに至ったかもしれぬ。が、今では彼の心も頭脳もその可能性を拒否した」と作者は註している。エリザベスとの再会を永久に絶たれたと感ずるアンドルーズは一路自殺へと追いやられる。成程ここには信仰の完成はない。しかしそれは反って信仰の重要性を益々切実ならしめるであろう。

(2)

The Man Within を書いた後彼が積極的に裏切をとり扱った小説は（少く共我々が入手できる範囲内では）*A Gun for Sale* であって、それまで7年間我々は待たねばならぬ。その間に彼は *Stamboul Train* (1932), *It's a Battlefield* (1934) 及び *England Made Me* (1935) を書いた。恐らくこの期間は作家として立つ野心に燃えていた頃で、当時流行のジョイスやハクスレイ等の影響の下で自分のスタイルを模索していた頃でもあろう。そして彼の努力は報いられて、これ等三つの作品は相当の成功を収めた。それが示すリアリティは本国の批評家から賞賛された。しかし彼の本領はあくまでサスペンスに富んだ話術にあり、彼が後年平易な英語を駆使して巧妙に魂の葛藤を描く作風に変ったのは本来の姿に帰ったとも云えよう。ここで以上の3冊を一括することは困難だろうが、強いて云えば作者はこの諸作で人間界を悪の風土として提出して信仰の必要性を暗示しているということである。ここでは裏切らないまでも裏切られる世界が展開する。

Stamboul Train は an Entertainment (娯楽物) と銘をうたれていて、そこに作者の何等かの息抜きがあるであろうが、決して真剣な問題が含まれていない訳ではない。*Stamboul Train* とはベルギーのオステンドを出発し、コロン、ウイenna、スポチカを経てコンスタンチノーブル（スタンプール）に達する特急であるが、その列車を中心として織られる人生模様が興味深く語られて行く。この題名は小説の舞台を現わしているばかりでなく、人生の象徴でもある。人間はこの列車の乗客のように、前後左右に体を傾け、平均をとり、しがみつき、順応していかねば成功は覚束ないと作者は考えている。事実、この列車にのっていた者で成功する人間は目先のきく順応性のある悪人乃至辣腕家のみである。正直で忠実な者は皆失敗者となる。これはこの世に正義の行われぬことの強調であって、所謂「娯楽物」とはいささか趣を異にすることを注目したい。ツィンナー博士は

故国ユーゴスラビヤを去って英国に亡命すること5年、今故国の革命指導に帰って行くところである。極貧の両親に食うものも食わぬ程にして育てられやっと医学博士の学位を得たが、開業数年にして医術を棄ててしまった。社会の改造なくしては医学に何の力もないことに気付いたからである。彼は今では息子でもなく、医者でもなく、信者でもなく、唯社会主義者であった。彼とてかつては神を求める心はあった。併しその希望の燈を、神とは金持が貧乏人を満足させておく為発明した嘘構であるとして、自分で吹き消してしまっていた。そして彼は故国の革命を唯一の希望とする人間となった。然もその最後の希望を裏切られるのである。ユーゴーでは彼の帰来を待たず急進分子の蜂起が行われ、見事に失敗していた。それを彼は車中で知る。万事は休した。今となってベルグラードに帰るのは無意味である。ウイennaに下車すべきではあるまいか。だが仲間と一緒に裁判にかけられるなら、世の人も私に耳を傾けて立上ってくれるかもしれない。彼は一縷の望をいだいて故国に帰る決意をする。併し警察の手は既に廻っていた。国境近いスポチカで彼は捕えられ臨時裁判にかけられ、3時間後の死刑を宣告される。そして偶然一緒に捕えられた20才の踊子コーラルと殺人犯グリェンリッヒと力を合せて逃亡するが、彼のみ射たれて倉庫の中で苦しみながら息をひきとる。彼が死を前にして懐く心境は複雑である。彼は考える、もし自分がキリスト教徒であれば、殺人犯が逃亡に成功し自分が死ぬということを調和きすことは困難だろう、自分は柔軟性をもたず余りに忠実すぎてその為失敗したのだ、と。彼とても自分の卑しき、女に子供を生ませるような不始末、たとえ官憲の眼をくらす為とはいえ一等で旅行するような虚栄心を恥じて「神よ、許し給え」と思わず祈るような時もあった。併したとえ神が存在したとしても、彼は許して貰える保証から閉め出されていた。彼は自分の方からその保証の手を拒否していたのだ。彼の死を見守る平凡、善良そして無知なコーラルの心境もツインナー博士に近い。彼女は折角獲得した恋人を何の理由もなくひき離されて、「立派に振舞うこと、正しいことをするのはもう真平だわ、損だもの (It doesn't pay.)」と独語する。

こうした不正義の横行を許すことによって、作者グリーンは何を語らんとしているであろうか。恐らく人間のささやかな正義や正義感では救われようがない、ということであろう。殺人犯が栄え、誠実な者が滅ぶという矛盾は、実は一度神を本当に信ずれば一瞬にして消え去る性質のものであるまいか。ツインナーは今一步を進めて、自分が神を裏切っていたことの真の認識に達した時救われるであろう。

次作 *It's a Battlefield* も暗澹たる小説である。Kinglake の「戦場は個々の兵士の肉眼に映ずる範囲内に於ては、全体性を持たず、深さ、大きさ、形、長さ、巾もなく、戦場を形成しているものは各地点に於てたちこめた霧の許す範囲の視界しかもたぬ無数の小円にすぎなかった…」という言葉が冒頭にある。これが多くの人の送る人生である。従って人生の全局を見渡す神が想像されるが、それは少しも表面には出されていない。登場人物のすべてが動揺し、失望し、失敗する。神を見ることのできぬ救いような人間像と作者は云うのであろう。コンラッドは共産党員の兄ジムが逮捕されて以来、兄嫁ミリーを援助し激励しているが、秘かに彼女に愛情を持っている。しかし兄を裏切って彼女に対し最後の一线を越えさせたものは pity (憐憫) であった。約15年後、*The Heart*

of the Matter に於てグリーンは同じくこの *pity* から破滅して行く男を描いたが、コンラッドに於てはこの裏切後、*pity* は *self-conviction* (自己悔悟) へと変る。彼は自殺を思うが果さず、遂に兄の生命をあずかる (と彼が思った) 警視庁副総監をつけ狙い、いよいよ彼と対決した時車にひき殺されて仕舞う。一方副総監はどうか。彼は数多いこの小説の登場人物中で、何等かの信念 (*faith*) に達し得た唯一の人間だった。ジムの刑の裁定に内申を求められた彼は色々と苦慮するが、意外にも刑は彼の助言を待たずに決定してしもう。併し彼はこの裏切によって生れた恥辱、自信喪失から立直る。そして猛然と仕事を始める。彼を立直らせたものは、自分が正しい側にいるという信念、目前の正しいと思う仕事に没頭することが生きることだ、という信念であった。しかし悲しいかな、彼が持った信念は戦場の限られた狭い地点に立つ兵士の信念ではあるまいか。

次に来る *England Made Me* は大英帝国が作り出した 'remittance man' を描いて作家的手腕を高く買われたものである。ケイトとアンソニーは 32 才の双生児であった。この双生児であることはアンソニーを側面から照し出すのに役立つ。彼は子供の時ケイトに庇護された経験からいつまでも脱け出せない男、口を開けば嘘をつき、必ず失敗し、次々と英国の植民地を渡り歩いた男である。それでいてケイトは彼を愛さずには居られない。彼女は自分の暮すスウェーデンで彼と共同生活をしようとする。ケイトに云わせれば、彼は「失敗を自慢する」(*conceited with failure*) 男である。否。実は失敗するからそれを自慢せざるを得ない男である。このムードはスウェーデンで本国からの送金生活を送っているミンティと共通する。彼等は二人共本国からの追放人であり、放浪者であり、移り行く世界の敗残者である。厭世的で平和とか協力とか労働の神聖とかを信ずることができず、又たとえ信じたとしてもそれに向って行動するには年をとりすぎている。彼等は倶楽部に集って昔の思出を話す時のみ幸福らしきものを感じず。そのアンソニーも唯一度丈正義感を現わす。そしてその為殺されてしもう。ツインナー博士とは別の意味に於て順応することを知らぬ男達である。最愛のアンソニーに裏切られ、そして死なれたケイトが、本国へ帰らないかと云われている言葉「私は唯移って行くだけ。アンソニーと同じように」は何という孤独感を現わしていることか。ケイトも又英国が作り出した人間の一人だった。

グリーンが持っていた筈の信仰は以上の三作では表面には出ていない。否、敗残者ミンティ等をカソリック信者にすることによって、偽信者の姿を描いて見せたといつてよいであろう。これ等の暗澹とした作品はグリーン之眼に映じた人生である。この悪に満ちた世界に対処するにはどうしたらよいか。答は一つ、神をうち樹てる以外に方法はない、と彼は云っているのである。

(3)

A Gun for Sale (1936) は「娯楽物」と名付けられ、一応その名に値する大衆小説といつてよいであろう。題名は軍需会社で造られる販売用拳銃一丁がこの事件の性質を説明しているからである。レイヴンという殺し屋が 200 磅の報酬と前金 50 磅で欧州某国の軍需大臣を殺す。この大臣は実は「人類の味方」と云われている男で戦争防止に努力している人だった。レイヴンはそれを後で知って後悔する。彼に暗殺を依頼した男は実は軍需会社を経営するマーカス卿の手先デイヴィスであ

った。この男がレイヴンへの謝礼金に盗金をつかませたことからレイヴンは追われる身となる。彼を追う警部マザー。そしてその許婚者アンは渦中にまきこまれてレイヴンと行を共にすることになる。併し万事は目出度解決する。戦争屋マーカス卿とデイヴィスはレイヴンに殺され、レイヴンはマザーの部下ソングーズに射殺される。だがこの娯楽小説は少く共二つの重大な問題を含んでいる。一つはレイヴンの生涯である。彼の母は夫が刑務所にいる時彼を生んだが、6年後夫が別の犯罪で絞首刑にされた時、彼女も又包丁でのどをかき切って自殺していた。その姿が永久にレイヴンの脳裡にやきついている。しかもレイヴンは兎唇に生れついていた。孤児収容所の誰がこの少年をまともな人間に教育出来るであろうか。愛情の枯渇、裏切の連続、孤独、遂に仲間のカイトを殺して悲惨な一生を運命づけられる。しかも辛じて愛情らしきものを感じたアンにさえ、最後に裏切られたという絶望をもって死んで行くレイヴンを神はどのように裁かれるであろうか。ここでもすべてが神の御手に委ねられているようだ。問題の二は、アンの裏切である。アンは明るいロマンチックな女である。レイヴンを憎みはするが、出来ることなら戦争屋マーカス卿やデイヴィスに復讐させて、それにより戦争を防止してから逮捕させたい、と決心している。それをうっかり口をすべらせて、レイヴンの所在をマザーに暗示して仕舞う。即ち無意識の裏切が行われる。これに関して批評家 J. Atkins の洞察は鋭い。「A Gun for Sale の教える所は全く明白である。それは、人間は誰でもいつ人を裏切るかわからない、ということである。裏切らないのはその労をとる価値がないからに過ぎない。レイヴンは常にこの事を信じていた。そして一時はアンの誠実さに戸惑いを感じた。しかし結局彼女も万人の例に洩れなかった。彼女が自分の意志に反して裏切ったということは、その裏切を益々不可避的なものに思わせるにすぎない。人間が進んで裏切らないならば環境がそれを強いるのである」⁽¹⁾この事は又グリーン自身も別の機会に語っている、「これ(裏切)はそれ故こうした若い婦人達のみが当面する運命ではない。誰もが必ず人を裏切るか、或は運がよければ(と云ってよいか解らないが)必ず裏切られるのである。」⁽²⁾成程、裏切が人間の宿命ならばレイヴンの一生もありふれた人間の一生の拡大図であったかもしれぬ。モームならば諦観して肩をすくめて見せる所にグリーンは神を見た。人間は絶えず裏切るかもしれぬ。しかし裏切った、という意識は直接神につながっている。この意味に於て、裏切の意識がない所に神は現われない。次に書かれた三部作がこれを実証するであろう。

註(1) John Atkins : *Graham Greene*

(2) G. Greene : *The Lost Childhood and Other Essays* (The Portrait of a Lady)

(4)

1948年 *The Heart of the Matter* が発表された時カソリック陣営は動揺して、E. Waugh の如きはこれを「気狂いじみた冒瀆」と評した。これに対してグリーン自身は当惑して「私は *Brighton Rock* で地獄へ行く男、*The Power and the Glory* では天国へ行く男を書き、そして今度は煉獄

行の男を書いた丈だ。一体この騒ぎはどうしたことか」とタイム記者に語ったと云われる⁽¹⁾。私はここで彼のこの言葉をとやかく云う積りはない。唯、私はこの三部作における彼の意図が奈辺にあったかを示し、同時にここで各々の主人公をカソリック信者にすることによって、彼がいよいよ教会内の問題に手をつけたことを指摘しておきたい。この事は彼が神への直接の裏切を検討し始めたことを意味する。今までは非カソリックが主人公であって、作者はその限界をこえない限り主人公に何を云わせ、行わせようと勝手であった。併しここでは、いわば内輪同志、玄人同志の問題が取扱われ、作者の態度如何では教会内部から批判の声が上るのは当然である。その危険を冒してまで書かねばならなかった、ということはグリーンの家精神が単なるプロパガンダで満足し切れなくなったことを意味するであろう。

Brighton Rock (1938) は彼の傑作に数えられている。この愚連隊 (mob) 小説は「ヘイルはブライトンに来て3時間も経たない内に、彼等が自分を殺そうとしていることを知った」という文章で出発する。そしてそれ以後ずっと誰が、何時、何処で殺されるかわからない、といった不気味なサスペンスが全篇に漲っている。この一寸先は闇といった不安なムードは主人公のピンキイというカソリックの不良少年によってかもし出される。ヘイルは必死の逃晦を試みたが遂に「彼等」即ちピンキイ一味に殺されてしまう。彼が殺される前の短時間行動を共にしたアイダは、ヘイルの死因が自然死と新聞に報ぜられた時から疑問を持つ。彼女は持前の「正義感」からこの事件に興味をもちピンキイ一味を次第に追いつめて行く。ピンキイは事の発覚を恐れて、レストランの余り美しくない給仕女ローズを事件にまきこみ、遂に彼女の証言を封ずる為結婚せざるを得ない破目になる。併しアイダの追求はきびしくて最後にピンキイはローズを殺そうとして果さず、遂に自滅し果てる。筋から云えば作者がそのペンギン版で銘を打ったように「娯楽物」とも云えるであろう。

だが内容は娯楽物どころか、魂の救済、非救済を扱う本格小説である。ピンキイもローズも同じ貧民街を故郷とする17才の未成年者で、カソリックの洗礼を受けていた。ローズのピンキイへの傾倒は unreal であるが、この二人の織りなす神と恋と裏切の葛藤がこの小説の主眼点であろう。ピンキイは全く自己中心で人殺しを何とも思っていない少年である。論理的な思考は出来るが想像力を持たない男である。しかし彼にも不幸な幼年時代があった。彼の性へのオブセッションは、土曜の夜毎の両親の営みを隣のベッドできいている思出、から発していた。彼は女も酒も煙草も拒否した。彼の唯一の望は愚連隊の一方の旗頭となることだった。併しヘイルを殺したことから次々と仲間を失い、次々と人を殺さざるを得なくなる。遂には自分を愛してやまぬローズをも殺そうとする。彼は彼女に向って云う。「おれは信仰なんてものは信用しねいんだ。地獄か、それや、ちゃんとあるさ。だがそんなもの考える必要ないよ——死なないうちからな」彼とて鑑から落ちて地に着く間にも、告解すれば救われることは知っていた。しかし何時でも彼にはその時間がなかった。彼は生きることに精一杯だった。彼は云う「生きることがどんな事か教えてやろう。それは監獄よ。金を作るのに何処へ行ったらよいか分らないってことよ。蛆虫とそこいと腐みていなもんさ。二階の窓からぎゃあぎゃあ言っるのが聞えるだろう、——子供がうようよ生れてきやがって。生きるってゆくり死ぬことよ」彼こそ人を裏切り、神を裏切り、絶望の大罪を犯す悪の象徴であった。グリーン

は彼を「地獄行きの男」と断じた。併し彼は何と神に近接していたことだろう。一方ローズはどうか。彼女はピンクイに言い寄るふりをされたばかりに彼を恋してしもう。何とかして彼女をピンクイから引き離そうとするアイダは、こう云って説得する。「私はあなたが知らないことを一つ知っていますよ。正邪の区別です。それを学校では教わらなかったでしょう」と。アイダの云う通りだった。正邪という言葉はローズにとってどうでもよいことだった。それよりもっと強烈な善悪という考に彼女の心は養われていた。善悪については彼女の方がよく知っていた。彼女は何度かためして見て、ピンクイが悪人であることを数学のようにはっきり知っていた。ピンクイが悪人であるとすれば、彼が正であろうと邪であろうと何の関係があろう。彼女はピンクイを愛することは絶望へつながっていることをよく知っていた。それでも彼女は愛さずには居られなかった。結婚の夜、ローズが彼のズボンにこっそり入れておいた紙片にはこうかいてあった、「愛しています、ピンクイ。あなたが何をなさろうと構いません。いつまでも愛します。あなたは親切でした。何処へ行かれようと私はついて行きます」と。このローズを、どうしても殺す必要があると知ったピンクイは心中すると偽ってつれ出す。彼女がいざとなつて試みた抵抗は生の本能によるものにすぎなかった。併し彼女は烈しくそれを後悔する——何故一緒に死ななかつたか、と。それを神父の許でやっと慰められ、励まされて帰るローズ。彼女が帰って行く今は亡きピンクイの家には、彼の最後の裏切が待っている。彼女が愛の証しとして大切に持っている（まだかけたことのない）レコードには、彼の声がこんな風に吹きこんであった。「畜生、ずべ公め、何故実家にいんで、おれを独りにしてくれんのだ」彼女がこの打撃よりどのようにして立直るだろうか、或は立直らないだろうか、それは語られていない。それは神の御手に、「神の慈悲の驚くばかりの不思議さ」に委ねられている。尚、紙数がないので省略するが、アイダもこのピンクイ、ローズに対立する重要人物である。我々は彼女を見る時、まるで中世から抜け出てルネッサンスの人物に出逢うような感を持つ。併しグリーンは彼女について「彼女の楽天主義には何かしら危険な、残忍なものがあつた」と書いている。

註 (1) John Atkins : *Graham Greene*

(5)

ではグリーンが「天国へ行く男」として描き出した人間はどうであろうか。 *The Power and the Glory* (1940) の第一部第一章「港」で作者は何気なくその素描をしてみせる。眼がとび出て、汚い歯をもち、みすばらしい服を着た小男。ポケットには禁制のブランディをしのばせている。港へ船を見に来たと云うが、実は何となく逃亡の機会をうかがっている。しかしこの機会は常に彼の不決断の為失われて、義務の命ずるままに再び奥地の無知な民衆の中に帰って行く男。これがウイスキー坊主と呼ばれる破戒僧でこの小説の主人公である。

メキシコのさる州は革命が起つて赤シャツ隊に支配されている。神への信仰は一切禁じられ、教会はこわされ、神父は迫害をうける。但し妻帯すれば生存を許されたが、これは今までの信仰が如

何に弱いものであったかを示す生き証人にする為だった。多くの神父が民衆をすてて州外に逃亡し、或は射殺され、今は只二人の神父が残っていた。妻帯の道を選んだホセ神父と本篇の主人公の神父だった。(後者の名は最後まで出て来ないので、以下単に神父と呼ぶ) 神父は今転々として州内を逃げまわっているが、彼の首には700ペソの賞金がかけている。彼とて早く捕まりたい、或は州外に逃げたいとも思うが、その気持を制えているのは射殺の苦痛であり、民衆を棄てることの苦痛であった。「捕まらないことが私の義務だ」と彼は信じている。警察隊長の命を受けた副官は各村落から人質をとって徹底的な搜索を開始する。神父は昔子供をませたことのある女を訪れて追い出され(ここで探しに来た副官の眼を部落民の協力で巧くのがれるあたりのサスペンスはグリーンの特長である)、今度は故郷カルメンを目指す。この山越えの時から彼は一人の混血児につきまわられる。この男はあくまで否定するが、賞金目あての裏切者であることは確かだ。例の裏切者登場である。併し神父自身も絶えず神を裏切っていないだろうか。彼は裏切と暴力と欲情の世の一典型にすぎぬこの混血児を見てキリストを思う、「こうした人々の為にキリストは死んだのだ。周囲に多くの悪を見たり聞いたりすればする程キリストの死に偉大な栄光が集る。善いもの、美しいものの為、家の為、子供の為、文明の為に死ぬのは易しすぎることだ、——不熱心者と墮落者の為に死ぬにはある神を必要とするのだ」と。作者の巧妙な筆によって神父への迫害は次から次へと展開する。彼は捕まるかと思えばのがれ、のがれたかと思えば又受難が始る。我々は余りにもその巧妙な筋の運び方に反撥を感じず。ここには reality はない。しかしその不自然さをのり越えて我々に訴えて来るのは、人間性、人間の可能性、信仰の必然性への作者の烈しい探求欲である。神父を最後に畏にかけようとしたのはあの混血児であったが、神父は自ら進んでその畏にかかって、副官の手におちる。己に与えられた義務を果す為だった。神父は悟っている、自分が失敗したのはプライドの為であった、と。州内で一人のまともな神父も居なくなった時、彼は自分こそ神の代弁者であると考えた。そのプライドが彼の墮落の第一歩だった。彼は神父の義務を怠り、酒をのみ、おまけに酔った揚句女に子供をませた。困難であるとか、危険であるとかの理由で或る物を重要と考えるのは誤である。彼は逃亡という容易な道を選んでより多くの人々に神を与えるべきだった、と彼は考える。併し彼は知っていたであろうか、彼が逃げなかったからこそその悟りに達したということ。彼が救われる為にはこのプライドという無意識的な神への裏切が必要であった。彼が見慣れて来た信者や僧職の人達の「敬虔」(piety) さえも如何に自己満足に満ちたものであるかを知るには最悪の「悪」の体験を必要とした。彼が死を前にして到達した境地はこうである、「若しこの州内に一人でも地獄に落ちる人間がいたならば、私も又地獄に落ちよう」ここで我々は前作 *Brighton Rock* にひき戻される。そこの終章で神父がローズに向かって云う言葉が正にこれと合致するからである。「我が子よ、あなたは知らないだろうが、あなたと同じ考をもっていたあるフランス人がいた。この男は善良で信仰心が厚かった。そして一生罪の中で過したのだが、その理由は誰かが地獄に落ちるかもしれないと考えると堪らなかったからだ。この男はこう決心していたのだよ、若し誰かが地獄に落ちようとすれば、自分も又一緒に落ちようと。この男は秘蹟をうけず、教会で結婚式もあげなかつ

た。我が子よ、私にはよく解らないが、この男のことを——そうだ、聖者と考えた人もいるのだ。この男は私達が大罪と教えられているものを犯して死んだと思うが、よくわからない。戦争中のことだった、おそらく——」以上の言葉から我々は、グリーンが考える「救われる人達」の姿を大体察することが出来るよう思われる。

(6)

The Heart of the Matter (1948) も善意の人、常に真実を語ろうとする人の悲劇を扱って、惻々として人にせまる迫力をもっている。警察署長代理スコッピイはアフリカの一植民地に住みついて15年、今ではそこを離れられなくなっている。そこが虚飾をつけぬ、悪に満ちた、赤裸々な人間性をはっきりと曝露させ、天国をそのあるべき場所、死の彼岸に定着させ、この世に幸福がないことを悟らせてくれる場所だったからである。彼の心は常に憐憫 (pity) と責任を基底として動いていた。憐憫はその信ずるカソリックの神から教えられ、責任感はその職業の為に益々とぎすまされていた。同じくカソリックの妻ルーズに対する愛情はとっくに冷めていたが、彼女を幸福にしてやる責任は岩のように彼の心にのしかかっていた。彼はユダヤ人から借金してまで妻の願を許し、妻を南阿に保養にやった留守中、19才のヘレンと偶発的な関係を生ずる。彼女は雷撃をうけて沈沈した船から彼が助けてやった女だった。これも憐憫の仕業だった。ヘレンも関係を生ずるや否や、忽ちルーズと同じく彼に責任を強いる重荷となる。ルーズは友人から事情を知って急いで帰宅し、夫にざん悔を迫る。今や彼には探るべき三つの道があった。

その一は、ヘレンを棄ててあくまで妻の側に止ること、これはヘレンを絶望の淵に追いやり、且彼女を好色漢の餌食にすることだった。その二は、妻を去ってヘレンと同棲すること、これは彼の妻に対する責任感の許すところでなかった。その三は、ざん悔をしても赦罪を求めぬことだった。これは神を侮辱することで、信者として止る限り彼のなし得ぬことだった。併し彼の人間愛は神への愛に勝った。彼は第三の道を選んだ。ここから彼の悲劇が始る。神は教えていた、何物にもまして自己の魂を救え、と。しかし彼は神に向って叫ぶ、「いゝえ、私はあなたを信用しません。私はあなたを愛しますが、あなたを信用したことはありません。あなたが私をお創りになったのなら、私がいっも煉瓦袋のように背負い歩いているこの責任感をもお創りになったのです……」と。この人間に対する責任感と憐憫とが彼を自殺に追いやる。自分が死ねば二人は私を忘れ、幸福になれる。私がいるからこそ彼女等は不幸だ、と彼は考える。そして薬のみ過ぎという形をとって自殺の大罪を犯す。作者はランク神父に最後にこう云わせている。「彼のように誤りを犯した男の場合、変にきこえるかもしれませんが、私の見た所では、彼は本当に神を愛したのだと思います」と。

この小説が様々な論議を生んだ理由は大体想像出来るであろう。スコッピイの愛が love ではなくて pity である所に先ず問題がある。pity は之を与える者が一段上に居ることを予想させる。人間を pity できる者は神以外にはない筈で、スコッピイの失敗は当然の帰結である。併しカソリックの作中人物に神への不信を公言させ、自殺の大罪を犯させ、そして「本当に神を愛した」と神父

に語らせることは議論の余地がある。グリーンは果して教会の内に居るであろうが、それとも外に出ているであろうか。彼自身は内に居ると信じた。彼がスコッピイを煉獄に行かせたことが何より之を証明するであろう。だが、作中の至る所に見られる神への疑惑や不信はグリーンの本意を疑わしめるものがある、と評されても仕方がないであろう。たとえば沈没船のボートから、40日間の漂流の後救い上げられた6才の幼児が、遂に苦しみ乍ら息をひきとる寸前、スコッピイはその場に立会わされる。そして幼児の父の役を演ずる為、ハンカチで作った兎を必死になって踊らせて見せる。その額や鼻に浮んだ汗がありありと見える程、我々は感動するが、その時彼の発する言葉「なぜ神はこの子をもっと早く死なせなかったのか」という痛切な疑問は遂に解かれないのである。グリーンがこの頃から言い出していた「作家の disloyalty (不従順) の特権」は彼が作家である以上当然起るべき問題だ⁽¹⁾。併し彼は教会の門を出ることをなし得なかった。彼は続いて *The End of the Affair*, *The Quiet American* をかいたが、そこに現われる神は教会の外で見られた神である。彼は教会内の問題に手をつけて、信者を正面から取扱うことは最早ないであろう、と云えば早急な結論だろうか。

註 (1) グリーン自身の教会への裏切を示す、と云ったら皮肉になるだろうか？

(7)

グリーン作品は屢々「追う者」と「追われる者」の対比によって構成され、最後に「追われる者」が「追う者」へと転ずることによって終る、と云われている。この転回点は何か。それは勿論「神」であろう。しかしそれに至る門のこちら側には「絶望」が立っている。この絶望を経過することなしに人間は神に近づくことはできない。絶望は神を裏切る大罪であるが、その裏切なしに人間の救済はないのである。このことをスコッピイは誰よりもよく知っていた。

“Despair is the price one pays for setting oneself an impossible aim. It is, one is told, the unforgivable sin, but it is a sin the corrupt or evil man never practises. He always has hope. He never reaches the freezing-point of knowing absolute failure. Only the man of goodwill carries always in his heart this capacity for damnation.” (絶望は人間が自己の前に不可能な目標を置くことに対して払う代価である。それは許すべからざる罪と教えられているが、墮落者や悪人が行い得ない罪である。彼等には常に希望がある。彼等は完全な失敗を知る凍結点に達することは決してないのである。善意の人のみがこの地獄に落ちる能力を常に胸の中に持っている)

この絶望から立上ることの出来た者が「ウイスキー坊主」であり、立上れなかった者がピンキイであり、立上る為反って瀆神の行為をなさざるを得なかったのがスコッピイである。そしてアイダ、副官、ヘレン、ルイズは救われようがないであろう。彼等は絶望する能力すら持たないからである。グリーンは悪に満ちた人間性に絶望した。併しその絶望の彼方に神を認めることによって、彼自身救われると同時に、そこから猛然と物を書く意欲を与えられた。他を救うことが彼の任務となったからである。

最後に一つ指摘しておきたい事は、グリーン作品に登場する主人公達は最後に必ず死ぬということである。死なない者にはそれ程重要性が与えられていないことを意味するであろう。あらゆる宗教文学が how to die の文学であるとするなら、これは当然の結果である。人間は死によってしか救いは得られないのである。もし生存中に救われたりと信ずる者ならば、それこそ「プライド」であり、「敬虔」であり、墮地獄の独善であって、グリーン攻撃的となる。人間性の悪はこの世に於ける人間の救済を許さない。善はこの世に於ては達成されないものだからである。